

高島成侑・三浦忠司著

『南部八戸の城下町

―むかしのはちのへを偲んで―』

佐藤 一 義

一

本書は、昭和五十五年九月から十一月にかけて八戸市で行われた、「郷土史講座」における、「八戸城下」をテーマにした連続講演を土台にしてまとめたものである。その構成は全部で十五章から成り、八戸城下の形成や拡大されていく様子、武家町・町人町の概況と特質、八戸城の構造、各町の建築、町政機構、戸数と人口、商業発達や肴を中心とした商品流通の実態、防火と祭礼など、多方面から城下町八戸を論じている。

著者は、古建築を専攻されている高島成侑氏と八戸歴史研究会の中心的存在として活躍されている三浦忠司氏であり、高島氏が八戸城下の建築、三浦氏が歴史一般を担当し執筆されている。お二人とも歴史学が本職ではないとのことであるが、歴史研究に対する姿勢の厳しさと郷土八戸に対する愛情の深さとが十二分に感じられる本書は、著者自身も述べているように、「八戸城下に関する初めての実証的研究」の成果である

ことは論を待たない。

さて、進展する日本近世史の諸研究の中で、都市研究は遅れている分野の一つである。小野均氏によって本格的に開始された都市研究は、その後豊田武氏や原田伴彦氏によってさらに進められたが、両者とも「自由・自治」という観点から近世都市を論じられ、中世との関連を重視する立場であったのに対し、中部よし子氏や中井彦彦氏は、近世都市の位置づけについて、都市の類型的分類や社会分業という視点から幕藩制下の都市における特質と諸問題を論じる方法をとった。さらに七十年代に入り、あらゆる角度からの論考が発表され、都市研究者は数多くの成果を共有することになる。しかし、一方では、これらの研究がややもするとそれ自体個別のまままで終ってしまい、本来都市の主人公たるべき住民の総体が明らかにされないという傾向があった。松本四郎氏による都市住民論の展開は、このような研究動向に対する危惧から生まれたものであるが、注目すべき視点と言えよう⁽¹⁾。

このように、都市研究は最近活発になってきているが、今後は、
(1)あらゆる分析視角からの個別実証的な研究の蓄積
(2)それらを権力構造や地域性と関連させて論ずる拡大された視野
という二通りの方向が要求されているのである。

二

転じて本県については、如何なる現状であろうか。本県の都市研究の蓄積は、市史の類を除くと皆無に等しく、本格的論考となると管見の限

りでは見あたらない。農村に比べ史料が残りにくいという原因もあろうが、弘前・八戸・黒石・青森などの各都市をもつ本県としては、その研究分野がいささか偏っていたことは否めないであろう。

このような状況下において、本書の意義を考える時、まず、あらゆる分析視角からの個別研究が不足している全国的状況において、特に本県の城下町に関する研究成果として重視されるべきであることがあげられよう。

また、本書により城下町八戸の形成は、八戸藩の成立以後であることが確認されたわけであるが、周知の如く八戸藩の成立は、盛岡藩主二十八代南部重信が世嗣を定めず死去した際、幕府の特段の配慮によって、盛岡藩十萬石の中から二萬石を分地された寛文四年に求められる。寛文年間といえは、幕藩体制も確立期に入り、文治政治の展開が行われていた頃で、表面的には安定した時代であるが、このような時期に形成された城下町を取り上げることは、それ自体に大きな意義を持つと思われる。

例えば、八戸の武家町は同一階層・同一住居の構成をとらず、各武家町には必ず上級武士が住み下級武士を統率しているという本書の指摘が、平時における町内の身分秩序がそのまま非常時には臨戦体制に即応するという意味を持つとすれば、城下町八戸の形成は、幕藩体制の確立期にあたりながら、今なお中世的遺風の残存するものであったと考えられること。また、城下町を形成する際、盛岡藩領に囲まれている八戸藩にとつて、周辺の農村を取り込んだ経済圏づくりは急務であることから、藩権力による強制的な藩領経済圏づくりが行われたということは、八戸が確立期幕藩体制のもとにおける城下町形成の好例であると考えられるので

ある。本書ではこの点について充分触れているとはいえず、今後都市の特質を探る上でさらに検討すべき問題であろう。

さて、共著であることも本書の大きな特色である。ことに建築学からの記述はわれわれに多くの示唆を与えてくれる。例えば、三枚の絵図面を駆使して、古御殿から新御殿への改築は、家老野村軍記の功績の一つと伝えられている「居館新築」であることを明らかにしたことや、武家の屋敷相對替の原因は、家族構成や役職の変動にあるのではなく、修理する余裕が武家側にないという状況、さらに武士から在地願が相次いで出されているという指摘は目新しい。

また、城下の商業活動・商品流通に関してはかなりの枚数をさいて記述しており、八戸商人の生き生きとした姿が読み取れるが、それは、本文の上に小見出し・注・表・グラフなどを入れたことによって、一般読者にも理解しやすい体裁となつていることにも起因していよう。行き届いた配慮と言わねばならない。

このように本書は、制約された史料の中で、多方面から城下町八戸を論じており、今後の本県における都市研究のあり方の一つを示したと言えよう。

三

それでは本書によって示された本県の都市研究、ひいては全国の都市研究に課された方向とは何であろうか。都市をめぐる問題点はいへん多岐に渡り、浅学の筆者にとって全てを整理する力はない。ここでは、

本書をもとに気づいた点を若干述べてみたいと思う。

第一に、前述した武士から在地願が相次いで出されるといふ指摘であるが、著者はこれについて、「ここ八戸城下では、藩政期の末期にいたって、中世社会へ逆もどりするような生活がいられていたのであらうか。」と述べているが、果たしてどうであらうかという疑問を感じる。これは、八戸に限った現象ではなく、例えば、盛岡藩では、天保期に下級武士層が盗賊や商家奉公人となったり、農民と結びついて家臣団の分裂的行動がとられたことが報告されているし、幕府の御家人が、寛永期に拝領屋敷の中に長屋を建てて町人を住ませたり、自らも下層民化していく状況が見られ、成立期都市の仕組みの中にすでにその変質・解体の契機がつくられていることも検証されているのである⁽³⁾。よって、単なる逆もどりとしてではなく、都市下層民や家臣団の分解、ひいては城下町の変質・解体の問題としてとらえるべきであろう。

第二に、論証にやや性急さが見られる部分があり、それによって城下町八戸の特質に迫り切れていないのではないかという危惧を感じる部分がある。本書では、八戸城下拡大の要因の一つとして幕末時の国防強化策を、城下商業の発展の要因として回船の来航を、それぞれあげているが、その国防策や回船と都市がどう関連するかについてはほとんど触れていない。また文化年間の世帯数の増加は、都市への農村部からの人口流入と町人内部の階層分化のためであるととらえているが、その論拠としては、前者では天明大飢饉の際八戸城下の人口が増加したこと、後者は元治元年の八日町の借屋人比率が高いことのみを求めており、やや手

薄であると言わねばならない。この点については、都市と農村・都市住民の構成という観点から、実証的に深めていく必要がある。

第三に、庶民の生活が、われわれ読み手にじかに伝わってこないということがある。八戸城下の住民が、毎日を如何に生きたのか、換言すれば、藩権力は住民にどのような規制を加えたのか、それに対し住民はどのような行動をとったのか、果たして団結は可能であったのか、という視角からの論述が求められる。この点前述した都市住民論や共同体・役負担の解明は八戸においても重要である。

さて、これらの問題を解明するには、如何なる方法によってそれが可能であろうか。これは今後の全国的な課題でもあるのだが、まず町触れを整理することによって、藩権力がどのような態度で住民に臨んだのかわ知ることである。また町触れを伝達する機構、とりわけ町役人に関する研究を深めることである。町役人とは、全国で名称は異なるが、一般に町年寄や町名主と呼ばれる階層をさす。このうち町年寄は、本来町人身分であるが、苗字帯刀や屋敷・役料を拝領するなどの特権を得て町名主以下の町人を統制する職務を持つ。町年寄に関する本格的な論考は、『江戸町人の研究』（吉川弘文館刊）が代表的なものである。弘前においては、松山家と松井家が代々世襲し、禄高は百石であったこと、松山家は、城下形成に際し藩祖津軽為信により近江坂本において召抱えられたことなどが知られる⁽⁴⁾。筆者は弘前における町年寄の性格を、藩権力の末端にあって町奉行の監督の下に町政全般を取り仕切る中間管理職的な存在であったと考えているが、八戸の場合、町年寄は庄屋と呼ばれ、世襲ではなく困窮した特権商人の中から任命されていることが指摘された。

つまり、本書においては町年寄を町政自治組織の頂点ととらえており、この町年寄の性格の違いを、さらに全国的に考察し都市の特質の中に位置づける試みが必要であろう⁽⁵⁾。そのためにも、全国的に埋もれていると思われる町方史料の掘り起こしには、今後とも大いに意を用いなければならないと思う。

以上、まとまりのない批評を述べてきた。著者の執筆意図とかけ離れたのはずれな点も多かったはずであるが、都市研究の発展を願うあまりの失礼であり、御容赦いただければと思う。副題にあるように、本書によって「むかしのはちのへ」を偲び、多くの関心が本県の都市研究に集まることを期待したい。

註

(1) 松本四郎氏の研究成果は、最近『日本近世都市論』（東京大学出版会、一九八三年）にまとめられた。これには都市研究に関する研究史・動向・課題が整理されており参照されたい。

(2) 保坂智「天保期南部藩における家臣団の動向」（北島正元編『幕藩制国家解体過程の研究』吉川弘文館 一九七八年 所収）。

(3) 松本四郎「近世都市論」（深谷克己他編『講座日本近代史』3

第三章 有斐閣 一九八〇年。

(4) 弘前藩庁日記（御国日記、弘前図書館蔵）享保八年十二月二十九日の条。

(5) この点田中喜男氏は、城下町・外港都市においては職業的専門性という点から世襲を必然とし、地方都市では領国経済を支える者として交替頻度を多くしたという指摘をしている（田中喜男『加賀藩

における都市の研究』文一総合出版 一九七八年 参照）。

(B6判 三四〇頁 一八〇〇円 伊吉書院刊)

(岩手県立岩泉高等学校教諭)